新米事務局長日記（ステイホーム読書生活編）

2021 年は、沖縄県内で長引く緊急事態宣言もあり、読書やゲームなどインドアな趣味がまたはかどった 1 年でした。「芋づる式」とはよくいうもので、1 冊の本はまた別の本を呼び寄せ、きりがないことになるのです。そんななかから印象に残った書籍を、読書メモとともに 2 冊紹介いたします。（増山）

人間は自分の手を使い、道具を作る。

道具を使うことで、人の身体のある機能は代替され、拡張される。道具を得ることで、人の身体はやがてもはや道具ではなくなっていく。

「手の勝利」は「手の退化」を同時に招くのだ。

鷲田清一氏の『つかふ』に書かれているこれらの言説は、人の身体だけにかぎられた話ではないと感じる。社会でもおそらく同じことがいえる。

たとえば人や地域がもともと持っていた機能は、公共のサービスを得ることで置き換わり、拡張される。ただし同時に退化を招くことも否めない。

『つかふ　使用論ノート』
鷲田清一著（小学館）

『ひとのことばの起源と進化』
池内正幸著（開拓社）

池内正幸『ひとのことばの起源と進化』が主張していることは、「言語は必ずしもコミュニケーションのために生まれたわけではない」ということである。もともとは所有物の管理のために発生したらしい。

また、言語学者のチョムスキーは、「言語使用の圧倒的部分は内的である。すなわち、思考・思索のためである」と述べている。

それがのちにコミュニケーションという用途にも拡張されるようになった。

上の『つかふ』と照らしたとき、では言語をコミュニケーションのために特化させ、かわりに「思考の道具」を外部化してしまったとすると、人は思考と思索の方法をいつか忘れてしまうかも知れない。